

オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray)

【選定理由】

県内では新城市の作手地区で1981年に繁殖が確認され、その後豊田市の稲武地区でも繁殖していることが確認されていたが、近年これらの地域から繁殖期の生息が確認されておらず、繁殖種として絶滅の危機に瀕している。春秋の渡りの季節には伊勢・三河湾沿岸の農地や平野部の河川などに飛来するが、数が少なく近年その確認数はさらに減少している。夜間の調査が不足していることから、愛知県では、繁殖個体群は絶滅危惧ⅠA類、通過個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 28～33cm、翼開長 48～54cm。タンシギなど同属他種とよく似るが、一般的には体が大きく嘴や尾羽が長め。眉斑は目先で太く見え、尾羽の枚数は通常16枚～18枚である。タンシギ属4種の中では最も大きく、体は横長に見える。最も似ているチュウジシギとは幼鳥羽、成鳥羽共により体色が淡く見える模様などで識別は可能であるが、容易ではない。



愛知県知多郡東浦町, 2004年8月2日, 駒井恒弘 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

近年まで、山地の湿地や草原で少数が繁殖していた。春と秋の渡りでは、沿岸部の農地や草地、平野部の河川敷などでみられる。

【国内の分布】

主に北海道、本州北東部で繁殖するが、本州中西部、四国、九州でも少数が繁殖する。

【世界の分布】

ロシアの沿海州東部、サハリン南部、南千島、日本で繁殖し、オーストラリア東部、タスマニア、ニューギニアなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

タンシギ属の中では、最も長い距離を渡る種のひとつ。国内における繁殖地の環境は、北海道や東北地方では主に平野の低湿地、本州中西部から四国・九州にかけては、山地の開けた部分にある湿地や草原で、地上に皿型の巣を作る。繁殖期には、ズビーヤク、ズビヤク、ズビヤクと鳴きながら飛び回り、急降下をしながら尾羽でザザザ…と羽音をたてる独特なディスプレイ飛行を行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

新城市長ノ山湿原では1990年まで、豊田市池之平では2005年まで繁殖期に生息していた。他に豊根村の茶臼山高原や豊田市藤岡地区でも繁殖期の確認記録はあるが、いずれの環境も乾燥化や周囲の開発などの環境悪化がみられ、県内における繁殖絶滅の可能性が高い。

【保全上の留意点】

県内の高原に存在する湿原の環境や、その周辺の環境を保全するべきである。牧歌的な風景の中でしか生息や繁殖ができない野鳥やその他の野生生物がいることも理解されて、酪農業などの振興が図られることを望む。沿岸部では、本種に限らず水田を渡りの中継地としてきた水鳥のために、餌生物を含む生態系の保存を目的として、沿岸部の水田の一部で冬期湛水を行うなど、昔のように年間を通して湿潤な水田環境が保たれるよう、本来の水田環境の復元を図るべきである。

【特記事項】

2000年～2003年の繁殖期に、西尾市一色地区の干拓地に定着してディスプレイ飛行などの繁殖行動が観察されている。繁殖の確認はされていないが、本州中部地方の沿岸部では、特異な環境での記録といえる。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.243. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)